

◀システムの端末機器



履修表のページに移ります。以下同様に、学科→科目区分→科目と選んでゆけば、最後にシラバスに到達し、講義内容を見ることができます。

専用端末以外の端末から利用する場合は、端末がmosaicブラウザまたはそれに相当する表示機能を備えていることが必要です。

それらの端末からWWWサーバーに接続してmosaicを起動し、そこから理学部のサーバー（URLは`http://www.scihiroshima-u.ac.jp`）に入つて理学部教育支援情報システムを選択すれば、本システムが利用できます。

四 おわりに

本システムについては、今後検討していくべき問題点がいくつか残されていました。

(注) 本システムは、平成六年度大学改革推進費により整備した。

構築グループは、日置慎治氏（理学部助手）、山崎英治氏（理学部学生係長）、赤尾宗典氏（理学研究科）と筆者らである。

また、総合情報処理センターの相原助教授、西村助手のご協力をいただいた。

いままで、内容をさらに充実させるとともに、より使いやすいものへと改良していくことが必要です。学生生活に役に立つ厚生関係や就職関係の情報、諸手続きの案内等を追加していくことも検討中です。情報を提供する範囲についても検討すべきかもしれません。当システムはWWWを活用しているので、何も制限しなければ、国内はもちろんinternetで結合されたすべての国からアクセスできます（ただし、情報がほとんど日本語で書かれているので日本語環境が必要ですが）。

現在、学内に限定し情報を提供していますが、これを全国に拡大することを考えられます。これは、我々の教育・研究の内容を全国に公開していくといふ積極的な活動になりますが、情報によつては、プライバシーや著作権の問題を含む可能性があり、構成員による合意が必要となるでしょう。

（まつうら・ひろあつ）
みやむら・おさむ

医・歯六年一貫教育の中味

医・歯六年一貫教育事始め

医学部医学科・安田峯生

霞地区教育研究
究検討専門委員

会が課せられた大きな課題は、教養的教育と専門教育をいかにバランスよく統合するかであった。

この改革は、平成四年三月に出された「教育研究整備基本計画検討特別委員会答申」と、これを受けて同年五月評議会で承認された「大学設置基準等の改正に伴う広島大学の教育研究の整備と改善について〔大綱〕」の「学部の教育の整備について」に示された方向に基づいて行われた。

平成四年七月には医学部、歯学部、原爆放射能医学研究所（以下原医研）の教官から成る霞地区教育研究検討専門委員会が発足し、私がその委員長に選ばれたのだが、ここではその後の改革の実体と、現在の問題点、将来の展望を思いつくままに綴つてみた。

なお、ここに記すのは、あくまでも私個人の見方であることをお断りりしておこう。

ちなみに医学科では、旧カリキュラムでは医学進学課程で七十二単位以上

教育となつても、教養的教育科目は十六単位以上を履修することが義務づけられている。なお、専門的教育は百四十四単位以上が要求される。

新カリキュラムで特筆すべきことは、医学部・歯学部開設の教養的教育科目（専門関連科目）ができたこと、その多くに原医研の教官が参加していることである。

開設された分子生物学は、原医研・分子病理・丹羽太賀教授が、発生学・遺伝学は同・予防腫瘍・渡邊敦光助教授が担当教官である。

医学科と歯学科の学生計百五十名が同一の講義室で学習するのはこれが初めてであるが、今のところ講義に対する学生の質問も活発で、多人数講義の弊害は感じられない。

また、被爆者健康管理（原医研・医学・下方浩史助教授担当）や被爆者対策史（同・附属国際放射線情報センター・宇吹暁助教授担当）のような、広島ならではというユニークな科目もある。

また、医学科二年の必修科目である医学概論は、医学科教務委員会が企画したもので、「医学のめざすところ」、「医学史」、「宗教と生命観」、「医療倫理学」、「理学・作業療法学の基礎」、「身障者医療の現状」などの一連の講義の後、夏休み期間を利用して、広島県身体障害者リハビリセンタード一泊二日の実習を行う。

この早期体験学習は、新カリキュラムで初めて試みられるもので、専門教育の初期に臨床の現場の空気を触ることによって、学生の学習モチベーションを高めることが期待されている。

シラバスの効用

新カリキュラムの実施にともない、霞キャンパスの諸学科でもほぼ統一さ

れた様式のシラバスが刊行された。以前から医学科では「授業概要」と

題する冊子が印刷・配布されていたが、これは教科により様式、内容共にばらつきが大きかった。統一的なシラバスができたことにより、教官は関連する他教科で何時、どのような講義・実習が行われているかを把握し、その情報を自分の講義・実習に生かすことができた。また、教官は関連する他教科で何時、どのような講義・実習が行われているかを把握し、その情報を自分の講義・実習に生かすことができる。また、非常勤講師を含む複数教官で行う科目では、シラバスを活用して、必要な打ち合わせ、情報交換が進められている。

医・歯系カリキュラムでは、専門科目はほとんどが必修であり、シラバスが学生の教科選択のために役立つことは少ないが、講義内容と進行予定が明瞭に示されていることは、学生の予習、復習のために有用であろう。

歯学部のシラバスの「まえがき」に、カリキュラム委員長の浜田泰三教授が次のように記されている。「シラバスを媒介として、近年急速な進歩発展をしている歯科医学の膨大な教育内容が効率的に伝達されることはもちろん、さらに『勉強しない日本の大学生』ある『研究偏重になりがちな日本の大学教官』の汚名返上に役立つて欲しいのです。その為には学生・教官共にこれまで以上の努力を必要とします。シラバスは両者を結ぶ一つの絆ともなるでしょう」と。

現在、霞地区では再開発計画が検討されているが、その実現は相当先のことであり、それまでは、霞地区的各部局が協力して、既存の施設を活用するしかない。このような部局の枠を超えた協力が、将来の霞再開発に生かされることを信じて、関係者は知恵をしぼっているところである。

一方、いかにカリキュラムが改善され、シラバスが整備されても、各教官の熱意と教育方法の向上が伴わなくては、教育の改善にはならない。医・歯系教官の多くは、教育方法について系統立った学習をしてこなかった。

この点を改善するため、昨年八月、「第一回医学教育者ためのワーキングショップ」がカリキュラム・プランニングを主題として開催された。これは日本医学教育学会から講師（スタッフオース）を招

き、一泊二日の合宿で、教育原理として重要な、教育目標の設定、教育方法の設計、および評価法の策定について約四十名の参加者の全員が、事後の評価アンケートでこのワークショップの価値を認めしており、今年も第二回が開かれることになっている。

将来への期待

今回の大幅な学部教育改革の効果を評価するにはまだ早い。しかし、カリキュラム改革とシラバス作成を介して、医学部・歯学部・原医研の教官の交流が促進されたことは間違いない。部局間の壁も低くなつたように感じられる。

このような霞地区の一体感が、大学院・卒後研修も含めた医系教育の改善と、霞地区的有機的な再開発につながることを期待したい。



現在の問題点と改善のための努力

霞地区で教養的教育を行う上での大いな問題点は、教官と講義室などの施設をどう調達するかであった。